



筑紫女学園大学リポジット

A Categorical Approach to Prepositions AT,IN,TO,FOR,FROM,ON,BY and WITH

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-03-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 緒方, 隆文, OGATA, Takafumi メールアドレス: 所属:
URL	https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/1041

意味とカテゴリー： 前置詞 *at, in, to, for, from, on, by, with* の分析

緒 方 隆 文

A Categorical Approach to the Prepositions *AT, IN, TO, FOR, FROM, ON, BY* and *WITH*

Takafumi OGATA

1. はじめに

本稿は前置詞を、カテゴリー分析で考察する。カテゴリー分析とは、カテゴリーと成員の関係をスキーマで提示し、構文や語句が持つ意味を明らかにし、その特徴を示すものである。前置詞は群前置詞も含めると、かなりの数がある。また一つ一つの前置詞にも、多様な用法や意味がある。そのため前置詞の多義性を捉えるには、何らかの視点が必要になる。本稿では8つの前置詞を取り上げるが、すべての前置詞が基本スキーマを持ち、それから発展した派生スキーマを持つと考える。つまり基本スキーマを中心に、前置詞の多義が説明されると考えていく。

以下の構成では、カテゴリーと成員についての考え方を2節で概観し、3節で関係特性に加え、位置特性もカテゴリー分析に含めることを述べる。4節から6節で、具体的に前置詞を分析する。4節では方向性がないスキーマ *at, in*、5節では方向性があるスキーマ *to, for, from*、6節では位置特性を含むスキーマ *on, by, with* を考察していく。

2. カテゴリーと成員

2.1 単体と複合体

カテゴリーは、(1)のようにラベルと成員からなる。ラベルはカテゴリー (1) につけられる名称で、成員はカテゴリー内の構成員になる。必ずしもすべてのカテゴリーが、ラベルと成員の両方を持つわけではないが、この2つが基



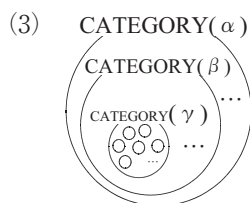
本となる。

カテゴリーが成員を持つ場合、異なる見方が2つある。成員が背景化される場合と、前景化される場合である。成員が背景化される場合、成員は意識されないため見えない。カテゴリー全体のみが見える形となり、いわば単体として存在する。この状態を単体(simple substance)と呼ぶ。一方成員が前景化される場合、カテゴリーも成員も見える。カテゴリーは成員の複合体として存在する。この状態を複合体(complex substance)と呼ぶ。

単体と複合体の違いは集合名詞でのふるまいが、分かりやすい例となる。集合名詞 family はあくまで〈ラベル〉であり、その成員は前景化されるか背景化されるかで、ふるまいが異なる。例えば(2a)の family は単体、(2b)の family は複合体になっている。(2a)では成員が背景化され見えないため、カテゴリー family が単体扱いとなり、単数動詞 is が用いられる。(2b)では成員が前景化されているため意識され、カテゴリー family が複合体となっている。そのため複数動詞 are が現れている。成員が前景化されるか背景化されるかで、単数動詞、複数動詞の使い分けが起こる。

(2) a. Her family is an old one. b. Her family are all very well.

この単体及び複合体の区別は、カテゴリー及び成員の両方に適用される。カテゴリーは、入れ子構造になっている((3))。上位カテゴリーもあれば、下位カテゴリーもある。その数もいくつ意識されるかは、定まっていない。成員もまた、カテゴリーになりうる。そのため便宜上、カテゴリーと成員に分けて述べていくが、両者の違いは関係性のみであって、成員もまたカテゴリーと同じものと言える。そのためどちらにも単体か複合体かの区別が存在する。



この単体か複合体かの違いは、前置詞の選択制限にも関わってくる。例えば in と at の違いとして、in の目的語は複合体を、at の目的語は単体をとるなどがある(後述)。

2.2 カテゴリーと成員の種類

前置詞の分析で用いるカテゴリーまたは成員の種類はどちらも、(4)の5種類を主に想定する。

()内は略記表現になる。前置詞は多様な意味を持つが、その理由の一つに、異なるカテゴリータイプをとることも一因になっている。

(4) a. 個体(Indiv) b. 場所(Place) c. 行為(Action) d. 状態(State) e. イベント(Event)

各種類を簡単に説明すると、〈個体〉は典型的には人や物を表す。個として認識されるものを指す。このときカテゴリーも成員もどちらも〈個体〉になりうる。リングで考える。カテゴリーが〈個体〉の場合、カテゴリーは1個のリングになる。このとき成員は、色(赤、青、etc.)、味、重さなど、リングの特性になる。一方成員が〈個体〉の場合、すべての成員が〈個体〉のリングになるため、カテゴリーは〈個体〉のリングの集合体になる。このときカテゴリーは、種としてのリングを表したりする。

〈場所〉は物理的または抽象的な場所を表す。〈場所〉も、成員の場合とカテゴリーの場合がある。ただカテゴリーが抽象的な場所のとき、尺度上の位置を表すことがある。尺度という一連のスケールの中に成員が位置付けられる。スケールもまた場所と考える。このとき時間もまた、尺度上に成員が位置づけられるので、場所カテゴリーと見なす。

〈行為〉は典型的には、カテゴリー全体で行為を表し、行為を成立させるものが成員となる。成員には、行為者、被動者などが含まれる。成員間でエネルギー移動などの関係が結ばれることもある。

次に〈状態〉では、カテゴリーが〈状態〉になる場合と、成員が〈状態〉になる場合では意味が異なる。カテゴリーが〈状態〉のとき、一時的特性を基本表す。ほとんどの場合〈個体〉が成員となるが、その状態は〈個体〉本来の特性ではなく、その状態カテゴリーの成員に、一時的になっていることを示す。個体の外側に、属性があるからである。また移動の結果として、状態カテゴリーの成員になる場合、あるいは成員でなくなる場合は、〈個体〉成員が状態変化したことを表す。

一方成員が〈状態〉になれば、恒常的特性を基本表す。通例カテゴリーは〈個体〉であり、〈個体〉の中に、成員として〈状態〉が存在するからである。つまり成員が〈状態〉の場合、個体がそうした状態を固有な特性として持つことを示している。

最後に〈イベント〉は、カテゴリーが〈イベント〉になることが多い。成員は、イベントを成立させるものなる。イベントと行為は似ているが、行為はあくまで単一の行為を表し、イベントは一連の流れを持つ出来事を表す。

3. 関係特性と位置特性

これまで行ってきたカテゴリー分析では、ある種の動詞または構文が持つ意味を、カテゴリーと成員、またはカテゴリーとカテゴリー間の関係で述べてきた。具体的には、包含または連結(移動含む)の関係で表し、状態・出現・移動・行為の4つの意味をネットワークの中で論じてきた。こうした関係による特徴付けを、関係特性と呼ぶこととする。

一方前置詞の場合、こうした関係特性に加え、位置特性を持つ場合がある。例えば、on, by, withなどは単なる包含関係とは異なる接触や近接という概念が必要になる。むしろ位置特性を持たない前置詞も少なくない。しかし前置詞全般で考えると、関係特性に加え、位置特性も持ちいる必要がある。関係特性と位置特性の2つを用いて、8つの前置詞を論じていく。以下個別の前置詞を3つに分類し、スキーマを通して分析を行う。一つめはスキーマに方向性がない前置詞(4節)、二つめにスキーマに方向性がある前置詞(5節)、三つめは位置特性が関与する前置詞(6節)となる。

なおここでは各前置詞の網羅的な意味・用法の列挙を目的としていない。むしろ意味の広がりや、スキーマを通して考察し、その多義性を明らかにすることにある。そのため各前置詞の意味・用法については、安藤(2012)をもとに述べていくが、必ずしも同じではない。以下具体的に述べ

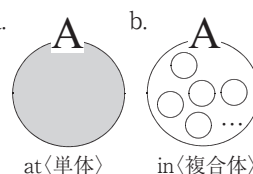
ていく。

4. 方向性がないスキーマ : at, in

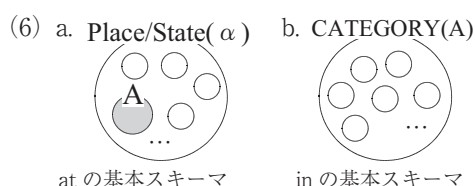
at と in は、場所や時間など似た場面で使われることも多い。(5) a.

しかし両者は、カテゴリーと成員の捉え方で大きく異なる。この違いは、2. 1 節で述べた〈単体〉と〈複合体〉の違いで説明される。

各々前置詞の目的語 A は(5)に示すように、at では〈単体〉、in では〈複合体〉になる。〈単体〉の場合、中が見えないので[点]もどきになる(灰色背景で表記)。一方〈複合体〉の場合、中に複数の成員を持つことから、[空間]もどきになる。これは in が空間、at が点とする説明とも符合する。



しかしそれだけでは、多様な用法を十分に説明できない。両者の基本スキーマを(6)に示す。まず at の基本スキーマが(6a)で、at の目的語 A は、カテゴリー内の成員となっている。このときカテゴリー α は、場所または状態になる。at の目的語 A は〈単体〉なので、A の中身は見えない。このとき複数成員の中から特定されることから、他ではなく、A だという含意がある*1。



次に in の基本スキーマは、(6b)になる。in の目的語 A は、成員ではなく、カテゴリーになる。このカテゴリーは複合体なので、成員(通例複数)が意識され見える。成員の中には、主語や目的語など言語化されるものが含まれることもある。つまるところ at と in の違いは、前置詞目的語の選択制限につきる。at は目的語が単体、in は複合体であることを要求する。基本スキーマ(6)をもとに、カテゴリーと成員の種類に応じて、多様性が生じる。以下具体例を見ながら、スキーマの妥当性を検証する。

at から見ていく。5種類ほどの意味がある。1つめは、物理的な場所を目的語にとる。カテゴリーは場所カテゴリーで、その単体成員 A が、at の目的語となる。他の場所ではなく、A という含意がある。

(7) a. You must stay at home today. b. The airplane is scheduled to arrive at Tokyo tomorrow.

2つめは、カテゴリー α が状態カテゴリーで、状態成員が at の目的語になる。その成員の特定の状態 A にあることを示している。スキーマは同様に(6a)になる。例として(8)がある。

(8) a. They must have felt at ease to see their children.

b. Japan was at war with China at that time.

3つめの意味は〈原因〉になる。感情を表すイベントが起こる原因を、at の目的語で表す。原因はイベントが起こる抽象的な場所と言える。そのため場所カテゴリーの一種として、原因カテゴリーが存在する。その成員が、at の目的語 A になり、どれが原因かが特定される。例を(9)に

示す。

(9) a. We are really pleased at the news of their marriage.

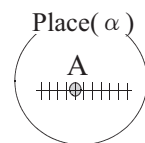
b. He got angry at her rude behavior.

4つめと5つめは、(6a)を応用した尺度スキーマ(10)になる。(10)では、 (10)

単体成員が尺度上に並ぶ。そのうちの 하나가、前置詞 at の目的語となる。

尺度上の場所を表すことから、尺度スキーマ(10)もまた、場所カテゴリー

になる。



at の尺度スキーマ

まず4つめであるが、〈価格・速度〉の意味がある。尺度の種類(カテゴリーの種類)が異なること

で、別々の意味になる。(11a)が価格、(11b)が速度の例になる。

(11) a. The books are sold at two million yen.

b. The driver drove at 60 mph on the mountain road.

5つめは、〈時間〉の意味になる。スキーマは(10)で、カテゴリー上の尺度が、時間になっている。時間カテゴリーの特定の単体成員が at の目的語となる。例は(12)になる。

(12) a. The train is due to arrive at 7.30. b. The film will be released at the end of this year.

ここで変種として、場所が行為を表すことがある。(13)では、at の目的語 A が場所を表しているのに、そこでの活動を表す。(13a)では食事、(13b)ではデスクワーク、(13c)ではコンピュータ作業、(13d)では自動車運転を表している。このときスキーマは(14)になる。

(13) a. John is at (the) table.

c. Kate is at her computer.

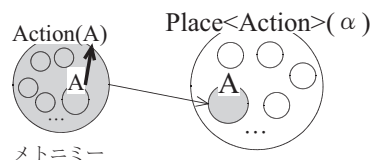
b. Mary is at the desk.

d. Mike is at the wheel. (友繁 2016: 143)

(14)では場所カテゴリーが、活動の含意を持つこと (14)

を Place<Action>(α) と表している。成員は場所名で

はあるが、実際は活動を表している。ここではメトニミーが働いていると考えられる。(14)の左部分がそれ



で、場所成員 A からのメトニミーで、カテゴリーラベルが A になっている。行為名ではなく、成員の場所名で置き換えて行為を表現している。それがそのまま Place<Action>(α) の成員となり、at の目的語として選ばれる。そのため場所名が、活動を表すこととなる。

一方 in は、7種類ほどの意味を持つ。(6b) (15) a. CATEGORY(A)

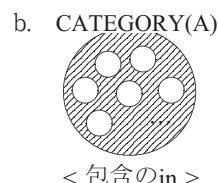
を基本スキーマとするが、成員がカテゴリー

のどの位置に現れるかで、2種類ある。一つ

は(15a)で、境界線に位置する〈境界の in〉、

もう一つは(15b)でカテゴリー全体に位置す

る〈包含の in〉がある。(15a)では3節で述べた位置特性が in の用法の一部にあり、それにより成員の位置が定まっている。(15a)の例が(16)、(15b)の例が(17)になる。



(16) a. The children were dancing in a circle.

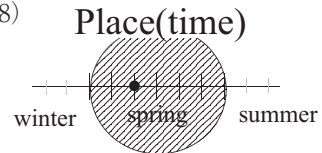
b. She was involved in a love triangle with Ken and Satoru.

(17) a. The diameter is the greatest straight line in a circle.

b. They lived in the center of Tokyo.

(16a)では子供は円上に輪になっており、(16b)では抽象的3角形の境界線上に個体が位置している。一方(17a)では直径なので円内の直線であり、円の内部にある。(17b)も東京中心部の内部であればどこでもよく、(15b)のスキーマとなる。(16a)(17a)の in a circle の例で分かるように、目的語となる名詞によって(15a,b)のどちらかが決まっているとは限らず、文脈等により(15a,b)のどちらのスキーマにもなりうる。

では1つめの意味、〈時間〉を表す in から見る。この場合、(18)基本〈包含の in〉になる。〈時間〉は尺度を伴うスキーマで、場所カテゴリーの一種になる。(19a)のスキーマが、(18)になる。



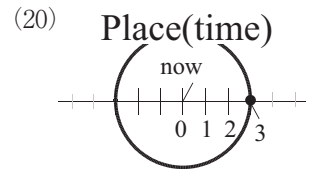
〈包含の in〉であることをカテゴリー内の網掛けで示している。

spring の内部で、物事が起こっている。このとき選ばれた尺度上の成員は、必ずしも明示されない。

(19) a. A lot of beautiful flowers bloom in spring.

b. The new movie is expected to be released in 2021.

また〈時間〉を表す in で、〈境界の in〉の意味になるものがある。(20)未来を表す in である。この場合(20)に示すようにスキーマは、尺度の中心点に now を据え、値となる数が境界に位置する。例えば in three hours では、3時間以内であるが、3時間は中心の now(ゼロ基準)から一番遠い最周辺(境界)に位置する成員となる。



未来を表す in では、〈境界の in〉になるため、この3時間が成員として選ばれる。しかし境界にある3時間は、3時間前と3時間後の2つの成員がある。とはいえ未来表現ゆえに、3時間後だけが意味の候補となり、それが選ばれることとなる。つまり未来表現における in は、〈境界の in〉であり、境界線上の後ろの方の成員を示すことになる。例を(21)に示す。

(21) a. We'll arrive there in about three hours. b. My account will be closed in 30 days.

2つめの意味に〈場所〉がある。ここでも基本〈包含の in〉になる(例は(22))。カテゴリーは尺度なしの場所カテゴリーになる。

(22) a. Tom loves an old chair made in England. b. The king once lived in the castle in Britain.

3つめの意味は〈状態〉になる。in の目的語 A が状態カテゴリーになる。このとき〈包含の in〉のみになる。個体、行為、イベントが、状態カテゴリーの成員になり、それらが一時的にその状態にあることを表している。(23)のような例がある。

(23) a. The lawyer left for Switzerland in secret.

b. She was in a hurry to take a shuttle bus to the airport.

4つめの意味は〈服装〉になる。ここでのカテゴリーは個体または状態になる。服装の場合、服そのものの中に、成員が位置するのではなく、服が包む空間の中に成員が位置する。そのため成

員は服ではなく、その内部の空間に位置することを示している。つまり箱と同じ状態と言える。空間における〈包含の in〉になる。例として(24)のようなものがある。

(24) a. A man in a red coat went to the mountain. b. The queen was dressed in white.

5つめの意味は〈材料〉になる(例は(26))。ここではイベントや行為が、inの目的語である材料や道具でなされることを示す。(25)に示すように、道具や材料に関わるものがゆるやかなカテゴリーをなし、その成員として、イベントや行為が含まれる。スキーマは〈包含の in〉になる。



(26) a. You must write your homework in ink. b. The statues were cast in bronze.

6つめの意味は〈範囲〉になる(例は(27))。〈範囲〉は、領域を表しており、場所カテゴリーの一種になる。いわば抽象的な場所を表している。このとき〈包含の in〉になる。

(27) a. Does she have any interest in sports? b. He has been lacking in common sense.

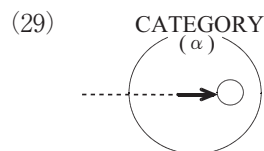
7つめの意味は〈形状〉になる(例は(28))。〈境界の in〉と〈包含の in〉がある。(28a)は〈境界の in〉で、その形状(境界線上)に成員が位置する。一方(28b)は〈包含の in〉だが、4つめの意味(服装)で見た、空間における〈包含の in〉になる。建物が炎になるわけではない。

(28) a. They sat in a circle to talk about the book. b. I saw the building in flames on TV.

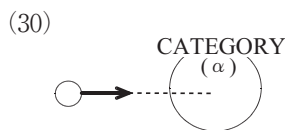
以上まとめると、in と at は方向性を持たないスキーマで、その大きな違いはそれらの目的語が〈単体〉か〈複合体〉かの違いにある。カテゴリーの種類や、どの部分を指し示すかにより、意味の多様性が生じていると考えられる。

5. 方向性があるスキーマ : to, for, from

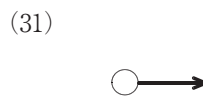
4節で見た at と in のスキーマには、方向性の含意はなかったが、ここではスキーマに方向付けがある前置詞を見ていく。具体的には to, for, from を見ていく。各々の基本スキーマは(29)(30)(31)になる。すべて方向を表す矢印が、スキーマの中に現れている。



to の基本スキーマ



for の基本スキーマ



from の基本スキーマ

to の基本スキーマ(29)は、カテゴリー内の成員が着点となることを示している*2。起点は、カテゴリー内でも、カテゴリー外でもどちらでも良い。for の基本スキーマ(30)では、カテゴリー外が起点となることを示す。カテゴリーに到達するかどうかは、各々の文で決まる。最後に from の基本スキーマ(31)では、カテゴリーとの関係は定まっておらず、単なる起点を表す。

まず to から見ていく。to は4つほど意味がある。1つめの意味は、物理的移動と抽象的移動の着点になる。カテゴリーが場所カテゴリーで、to の目的語がカテゴリー内の成員までに移動

し、それが着点となる。物理的移動の例が(32)、抽象的移動の例が(33)になる。

(32) a. He came to the door of the village.

b. She walked to the post office.

(33) a. He currently teaches judo to his students.

b. He devoted himself to his duties in the US Navy.

(32)では、物理的な場所カテゴリーの成員に、モノが移動する。移動するものは、構文によって異なる。一方(33)では、物理的に何かが移動するわけではないが、抽象的な移動があると認識される。

2つめに〈結果〉の意味がある。これは to の目的語が状態カテゴリーになっており、そこへカテゴリー外から移動してくることで、状態変化を表す。別の状態(カテゴリー)から、当該カテゴリーへ移動になるため、変化の結果を表すこととなる。

(34) a. He was nearly frozen to death. b. The glasses were broken to pieces.

3つめは尺度上の〈限度〉の意味になる。カテゴリーは場所カテゴリーで尺度があり、成員が尺度上に並んでいる。to の目的語は、尺度の限度を表す。from A to B の場合、A も B も同一のカテゴリー内の成員で、同一尺度上での範囲決めになる。このときも to の目的語は、限度を意味する。

(35) a. He was sick to the point of death. b. The art gallery is open from Monday to Friday.

4つめは〈関連〉の意味になる。イベントまたは行為が、カテゴリー内の着点となる成員に移動する。移動とはいえ、純粋な移動ではなく、イベントや行為がどれと関連付いているのかを指し示す働きをする。つまり移動することで、そのイベントまたは行為が向かう対象(着点)が、どれかを特定する。to の目的語が着点であり、関連付けられるものになる。何を関連させ特定するかは、動詞や形容詞が持つ意味によって定まる。この関係づけの移動は、for の用法にもある。(36)が比較の意味、(37)が適合の意味の例になる。

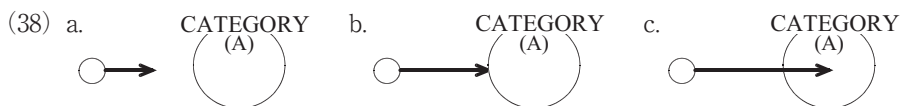
(36) a. The writer compared life to a voyage.

b. She prefers reading books to watching television.

(37) a. She danced to the music with serious looks.

b. Large-size dresses are made to order for each customers.

次に前置詞 for を考察する。基本スキーマは(30)であったが、移動がどこまで伸びるかで、(38)に示すように3つに細分される。(38a)は方向のみでカテゴリーに到達しない。(38b)は、カテゴリーに到達する。(38c)はカテゴリーの中まで移動する。このとき移動には2種類ある。一つは純粋な移動で、物理的移動と抽象的移動がある。もう一つは関係づけの移動で、(38b,c)にその用法がある。カテゴリーまたはカテゴリー内の成員に移動することで、関係づけられ、どれと関係づけられているかが特定される。これは to の〈関連〉の意味と、並行的である。



まずスキーマ(38a)の意味になるものが、5つある。1つめに(39)に示すような、〈目標〉の意味がある。物理的な場所への移動という、出発に関わる動詞・形容詞が用いられ、forの目的語Aが目的地を表す。

(39) a. He leaves for Boston this afternoon. b. I took a train bound for Hakata.

次に〈目的〉(例は(40))、〈追求〉(例は(41))、〈適性〉(例は(42))、〈利益・賛成〉(例は(43))がある。これらはすべて、(38a)の抽象的移動になる。〈目的〉ではイベントが移動し、〈追求〉では行為が移動し、〈適正〉では状態が移動し、〈利益・賛成〉ではイベントまたは状態が移動する。つまり意味は、何が移動するかによって違っている。見方次第では、(38b)の関連付けの意味とともとれるが、それに向かうという方向性が感じられるので、(38a)に含めることとする。

(40) a. I play the violin for amusement. b. A husband is to live for his wife.

(41) a. They had to look for the document. b. She heard a cry for help.

(42) a. Swimming is good for your health. b. Nobody doubts your fitness for the position.

(43) a. My uncle bought a dog for me. b. The children are all for going to an amusement park.

(38b)のスキーマになるものを見る。このスキーマの意味に、〈理由〉〈主語〉〈広がり〉がある。これらは関係づけの移動となり、関係づけられているものが何かを特定する。まず〈理由〉の意味では状態または行為が、カテゴリー(理由)内の特定成員と関係づけられる。

(44) a. We are sorry for the confusion. b. The restaurant is famous for its healthy cuisine.

次に〈主語〉の意味では、状態(その行為がある状態にあること)が、forの目的語まで移動する。移動によって、この行為の主語が誰であるかを関係づけて特定する。

(45) a. I think it is almost time for me to go home. b. It was unusual for me to call him out.

〈広がり〉の意味では、イベントが、尺度付きカテゴリーの成員に移動する。この尺度付きカテゴリーは、期間を表す。ある成員まで移動することで、関連付けられ期間の値が特定される。なお値は必ずしも、数値ではなく、(46b)のように期間を表す名詞でもよい。

(46) a. Ken studied German for five hours last night.

b. Let's leave this issue as it is for the present.

また(38c)のスキーマになるものに、〈代用・交換〉の意味がある。これも関係づけの移動になる。(38b)と(38c)は似ているが、(38c)の場合、複数の成員の中から、一つに特定される意味合いがある。一方(38b)には、こうした選択の含意がなく、単に特定されることを示す。そのため複数から選択の含意があれば(38c)、なければ(38b)ということで、両者に厳密な区別はない。

〈代用・交換〉では、個体や行為が、カテゴリー内の一成員まで移動し関係づけられる。そしてどれに対応するかが特定される。(47)が〈代用〉の例、(48)が〈交換〉の例になる。(47a)では傘が武器に関係づけられ、(48a)では本が270ドルに関係づけられている。ただ交換の場合、尺度付

きのカテゴリー成員へ移動し関係づけられることで、その値を持つことになる。

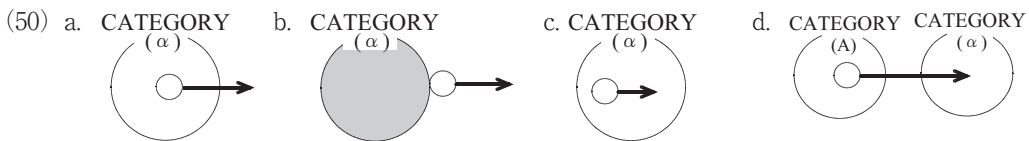
(47) a. Your umbrella will serve for a weapon. b. She passes for a high school student.

(48) a. This book was sold for 270 dollars. b. You can't get anything for nothing.

〈交換〉には(mis)take A for Bといった表現がある。この場合は個体ではなく、行為(Aの(mis)taking)が、forの目的語Bに移動し関係づけられることで、何にみなされたかが特定される。

(49) a. Her aunt was taken for the nanny. b. He is often mistaken for his brother.

最後に from は、基本スキーマ(31)を持ち、起点からの移動を表す。しかし(50)に示すように、カテゴリーとの関わりで、4種類に細分される。(50a)はカテゴリー内からの離脱、(50b)はカテゴリーに接する状態からの離脱、(50c)はカテゴリー内にとどまり起点となる。(50d)はカテゴリー内から、別のカテゴリーへと移動する。



(50a)と(50b)の違いは、カテゴリーが複合体か単体かの違いになる。複合体であれば、(50a)のように内部から移動する。一方単体(灰色背景で表記)であれば、内部に成員を認識できず、カテゴリー自身が点みたいになるので、(50b)のように接するところからの移動となる。

1つめの意味に、〈起点〉がある。このとき起点カテゴリーを複合体と見るか、単体と見るかで、(50a)(50b)の両方のパターンがある。(50a)の例が(51)、(50b)の例が(52)になる。

(51) a. I myself came back from England in 2019.

b. He borrowed five books from the library.

(52) a. The procedure is not changed from the starting point.

b. The courses will start from April 12th.

また〈起点〉には(50c)の意味もある。(50c)は、主に from A to B のような例において見られる。

次に〈分離〉の意味がある。この場合、(50a)(50b)(50d)の3パターンがある。(50a)の例を(53)、(50b)の例を(54)、(50d)の例を(55)に示す。

(53) a. The soft music freed her mind from anxiety. b. Three from ten leaves seven.

(54) a. He parted from his girlfriend in tears. b. The boy cannot distinguish right from wrong.

(55) The country is now very different from what it was thirty years ago.

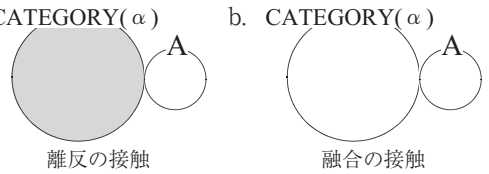
最後に〈原因〉の意味がある。これは(50d)のスキーマになる。状態や行為のカテゴリーAに属していた成員が、そこに属していたことが原因で、別カテゴリー α へと移動し、 α の状態になる。

(56) a. I was tired from the time-consuming job.

b. The man went insane from the disastrous accident.

6. 位置特性を含むスキーマ : on, by, with

前置詞 on では、位置特性が関わる。(57) a. CATEGORY(α)
 このとき on は、対象に接触していることを示す。スキーマは(57)に示すように、カテゴリーが単体か複合体かで2種

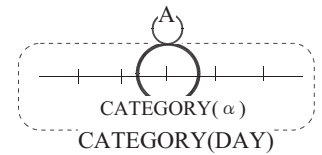


類ある。(57a)ではカテゴリーが単体になっている(灰色背景で表記)。そのためカテゴリー中の成員は見えないため、接触物 A とは別物であり、いわば離反した形で接している。これを離反の接触と呼ぶ。一方(57b)では、カテゴリーは複合体ゆえに中の成員が認識される。そのため接触といえども、周辺部で融合して、接触物 A はカテゴリーの(周辺の)成員となりうる。カテゴリーと接触物 A は離反しておらず、そこには融合がある。これを融合の接触と呼ぶこととする。そのため接触といえど、(57)に示すように、2つの接触があり、ふるまいが異なる。以下、具体的に on の意味を見ていく。

1つめは〈接触〉の意味になる。〈接触〉では基本(57a)になるが、(57b)も可能である。(57a)の例が(58)、(57b)の例が(59)になる。

- (58) a. The boy sat on a chair with his legs dangling. b. Does he have the lighter on him?
 (59) a. We live on the outskirts of Osaka. b. You and I live on the earth.

2つめに〈時間〉の意味がある。スキーマは(57b)の一種 (60)



で、(60)になる。融合しているため、そのときに起こるとい
 う意味になる。例えば(61)のような特定の日(の朝・昼・晩
 も含む)であれば、イベントや行為 A が、CATEGORY(DAY)

の成員 α (特定の日) に接触することで融合し、その日に起こる出来事となる。

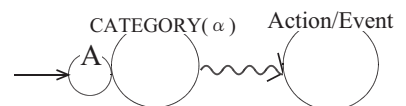
- (61) a. They were shooting for a movie on the 14th of September in Italy.
 b. The freakish accident took place on the evening of last Wednesday.

また行為と同時に何かが起こることを表す on doing((62))や on 動作名詞((63))の表現がある。

- (62) a. On arriving home, she laid herself on the bed.
 b. On seeing the painting, the teacher praised the student.

- (63) a. This trip ends on arrival at Hakata Station.
 b. On inquiry, I learned that they didn't receive the fax.

これらのスキーマは(64)になる。行為 A (on の目的語) (64)

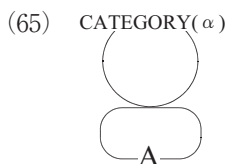


が、CATEGORY(α)に接触することで、別の Action
 または Event が起動する。A とカテゴリー α の接触

は、(57b)の融合タイプになる。そのため連動して、行為やイベントを発動させる。

3つめに、〈支え〉の意味がある。スキーマは(65)になる。on の目的語 A が、土台または背景

になって、状態や行為が起こる。(65)は(57b)タイプで、Aは複合体となっており、支えられるものと融合する。融合した形で、状態や行為が起こる。例として(66)がある。

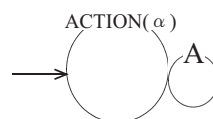


- (66) a. Their economy depends on the car industry.
 b. She lay on her back on the sofa.
 c. I'll act on your advice.
 d. He must have sworn with his hand on the Bible.

4つめに〈状態・活動〉の意味がある。スキーマは(57b)になる。onの目的語AとCATEGORY(α)(状態/活動)が融合する。つまりonの目的語を前提とし、状態・活動がおこる。時間的に重なりがあるが、必ずしも全体が時間的に一致するのではなく、(67a)のように、ほんの一部だけが重なることもある。

- (67) a. He came across her on his way home.
 b. The building must be on fire.
 c. Each person goes on a trip abroad with various reasons.
 d. He is now on duty at the office.

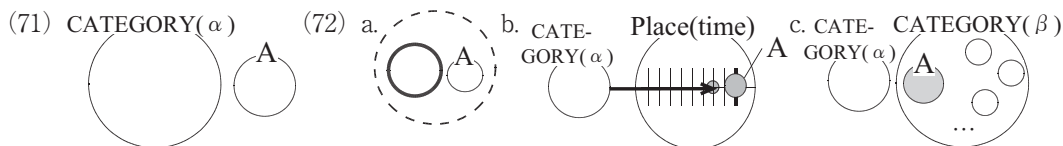
5つめに〈対象〉〈テーマ〉の意味がある。このとき移動の含意がある。スキーマは融合の接触(57b)を応用した(68)になる。(68)では、行為カテゴリーが、前置詞の目的語Aに、接触していない状態から、移動して接触することを表している。〈対象〉では、行為が目的語Aに接することで、行為の対象が、目的語Aであることを意味する。また〈テーマ〉でも同様に、行為の対象が何に関するものなのかを、接触することで特定することとなる。どちらも融合の接触であるため、それに関し



て行為が起こる。(69)が対象の例、(70)がテーマの例になる。

- (69) a. This medicine act on the liver. b. He couldn't concentrate on his work yesterday.
 (70) a. The professor spoke on English linguistics.
 b. The teacher dwelt on the importance of health.

次に前置詞byであるが、(71)のような基本スキーマを持つ。ここでも位置特性が関与する。(71)では、カテゴリーαと前置詞byの目的語Aが近接することを表している。実際の意味では、(72)に示すように、(71)で示した近接を基本としながら、3種類ある。



(72)で見ていくと。(72a)は近接した2つが、カテゴリーをなしている。しかし破線で示されているように、カテゴリーの強さは極めて弱く、ゆるやかなまとまりで一時的なカテゴリーとなっている。次に(72b)はbyの目的語Aが、時間カテゴリーの成員になっている。そのbyの目的

語の近くの成員まで、カテゴリー α が移動し近接することを示している。これは抽象的な移動というより、関連付けの移動であって、カテゴリー α の時間はこれだと特定する働きをしている。なお成員 A は、単体であり、いわば点として機能する。最後に(72c)は CATEGORY(α)と by の目的語 A が近接しているのは同じであるが、A が別カテゴリー(β)の成員となっており、その中から選ばれたという含意がある。このとき by の目的語 A は、単体となる。以上のスキーマをもとに、具体的な用例を見ていく。

1つめの意味に〈近接〉がある。スキーマは(72a)になる。主に物理的な近接を表す。ただ平沢(2019)が空間的近接性のところで述べているように、単に近いだけでは、by が用いにくい場合がある。つまり単に物理的に近接するだけではなく、近接する2つは何らかのまとまりが必要で、ゆるやかなカテゴリーに属していると考えられる(度合いが弱いことを破線で表記)。

(73) a. Would you set this table by the window? b. The guard didn't stand by the front door.

2つめの意味に〈時間〉がある。スキーマは(72b)になる。(72b)では by の目的語 A が、単体の基準点となり、A に近接する尺度成員までカテゴリー α が移動する。移動した結果、関連付けられ、値が特定されるが、移動先の着点そのものは表記されない。

(74) a. Will you finish this work by tomorrow if possible?

b. I handed in the necessary papers by the 31st.

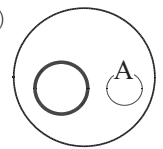
3つめに、〈手段・行為者〉と〈基準〉の意味がある。これらは(72c)のスキーマになる。〈手段・行為者〉の例は(75)、〈基準〉の例は(76)になる。

(75) a. The historical site is easily accessible by train. b. The riot was suppressed by the police.

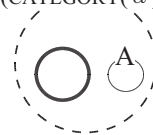
(76) a. Sugar is sold by the pound here. b. I missed the last train by a minute.

どちらの意味も、手段・行為者または単位などの基準カテゴリーの成員の中から、一つの成員が A に隣接し、それによって行為やイベントが起こる。

最後に with であるが、with はカテゴリー化の作用を持つ。ただし by と (77) 異なり位置的な近接ではなく、抽象的な意味での近接となる。この近接関係を生み出すものが、カテゴリー化になる。基本スキーマは(77)になる。



(77)では、主体となるもの(太線○で表記)と with の目的語(A)が、カテゴリーを形成することを示している。ただし (78) a. (CATEGORY(α)) b. CATEGORY(α) カテゴリー化には、強さに違いがある。弱いカテゴリー化が(78a)(破線で表記)、通常のカテゴリー化が(78b)になる(実線で表記)。



スキーマ(78a)では、結びつきが弱いためにカテゴリーラベルがない場合もある。抽象的近接が一時的過ぎるために、カテゴリーとして弱くなり、ラベルさえないこととなる。これを括弧付きで表記している。一方(78b)の通常の場合、ラベルがあるのが普通である。このとき成員となる主体と with の目的語は、前景化の度合いで異なる。with の目的語よりも、主体が前景化の度合いが強い。このことを太線で表記する。

まずスキーマ(78a)になる意味に、〈同伴〉(例は(79))、〈同時性〉(例は(80))、〈所有〉(例は(81))がある。いずれも主体となる成員(太線表記)と一緒に with の目的語が、ゆるやかに一時的なカテゴリーを形成する。そして両者が一体となり、行為をしたり、ある状態になったりする。

(79) a. I wish to discuss this matter with you. b. I can have lunch with you tomorrow.

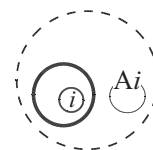
(80) a. Their salaries increase with length of service. b. The car race begins with the sun.

(81) a. The girl was waiting with a flower in hand. c. She looked at me with blue eyes.

b. He hit the man over the head with a stick. d. I bought the bag with a zippered pocket.

〈同伴〉の意味の場合、文全体が状態を表す時にはラベルがあつたりするが、行為や出来事を表すときには、基本カテゴリーラベルはない。次に〈同時性〉の場合、時間の概念を持つ with の目的語 A とゆるやかなカテゴリーをなすことで、その2つが同時に起こる。

一方、〈所有〉の意味では、2種類ある。一つは(81a,b)のように、スキーマ(82)



マ(78a)の用法がある。この場合、主体と所有物は別々に存在するものになる。もう一つは(81c,d)のように、主体の一部が with の目的語 A になる。

この場合スキーマは(82)に示すように、主体の成員と、with の目的語 A

に同一指標がつく。主体の一部だからである。しかし A_i は確かに主体の一部ではあるが、意識としては外在化しており、別物と認識している。そのため実質的には、(78a)と同じである。

また〈付帯状況〉の意味も、スキーマ(78a)になる。しかし〈同伴〉と違い、(83)



カテゴリーラベルが付与される。スキーマは(83)になる。〈付帯状況〉では

with の目的語 A が状態を表し、その状態で行為が行われることを示す。

例として(84)をあげる。

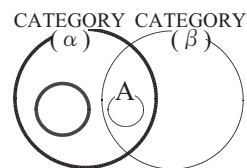
(84) a. The boy slept with the door open. b. It is very rude to talk with your mouth full.

次にスキーマ(78b)になるものに、〈一致〉(例は(85))、〈関係〉(例は(86))がある。カテゴリーが状態、行為、イベントになり、成員の2つには一体感がある。

(85) a. He completely agreed with Suzan. b. I am with you for the most part.

(86) a. My father fought with the burglar. b. I argued with her about the travel plan.

(78b)の変異形として、スキーマ(87)がある。(87)は(78b)と(87)



違い、with の目的語 A が別カテゴリー β にも属している。そのため A は、カテゴリー β の属性を持つことになる。このスキーマになるものに〈様態〉(例は(88))、〈原因〉(例は(89))、〈手段〉(例は(90))がある。

(88) a. They carried the bronze sculpture with care.

b. He fought the enemy with great courage.

(89) a. She blushed with shame. b. The student has been in bed with a cold for three days.

(90) a. The girl tried to cut the cake with a knife. b. We couldn't see anything with our eyes.

〈様態〉ではカテゴリー α が行為カテゴリーで、A がその行為の様態を表す(β が様態カテゴリー)

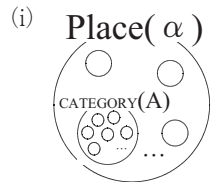
リー)。〈原因〉では α は主に状態カテゴリーとなり、Aがその原因を示す(β が原因カテゴリー)。最後に〈手段〉ではカテゴリー α が主として行為カテゴリーとなり、Aがその手段を表す(β が手段カテゴリー)。カテゴリーの種類によって、多様な意味が生じている。

7. まとめ

本稿は8個の前置詞を、方向性がないスキーマ、方向性があるスキーマ、位置特性を含むスキーマに分けて考察した。カテゴリー分析を行うにあたり、単体・複合体の区別、位置特性の有無、カテゴリーの種類などを用いてきた。前置詞は多様な用法や意味を持つ。しかし各々が基本スキーマを持ち、そこから発展するスキーマによって、意味が定まっていると考える。そしてカテゴリーと成員の関係で、スキーマが規定されている。前置詞は数多くあり、他動詞と前置詞挿入構文との違いなど考察すべきことも多い。今後の研究の課題としたい。

注

*1 inであっても、他の場所ではなく、Aだという意味が出る場合がある。これはスキーマ(i)に示すように、(6b)の上位カテゴリーが前景化され意識されている。上位の場所カテゴリーの成員から、Aが選ばれたと認識しているために選別の含意が生じる。しかしこの上位カテゴリーは、必ずしも意識されない。



*2 友繁(2016: 143-4)では、以下の例文をあげ、atとtoの含意が異なることを示している。

(i) Jane threw the ball at/to him. (ii) Paul shouted at/to me. (iii) George was talking at/to me.

(i)ではボールがtoに到着した含意があり、atにはない。(ii)ではatには嫌悪や敵意の暗示があるが、toはない。(iii)ではatが一方向的な会話、toが対話を含意するとある。これらはすべてatとtoのスキーマの違いから説明される。(i)はtoに方向性があること、(ii)はatが場所として働くため感情がのりやすいこと、(iii)はtoに方向性があるため双方向になりやすいからと考えられる。

参考文献

安藤貞雄(2012)『英語の前置詞』開拓社.

平沢慎也(2019)『前置詞 by の意味を知っているとは何を知っていることなのか：多義論から多使用論へ』くろしお出版.

Huddleston, R. and Pullum, G. K. (2002) *The Cambridge Grammar of the English Language*. U.K.: Cambridge University Press.

宮前一廣(1998)『日英比較前置詞の文法』松柏社.

奥野忠徳(2007)「英語前置詞 for の意味論」溝越彰他編(2007)『英語と文法と：鈴木英一教授還暦記念論文集』開拓社.

友繁義典(2016)『英語の意味を極める II-動詞・前置詞編-』開拓社.

Tyler, A., & Evans, V. (2003) *The Semantics of English Prepositions: Spatial Scenes, Embodied Meaning, and Cognition*. Cambridge University Press.

上田明子(2018)『イメージ感覚で捉える英語の前置詞：39の前置詞を集中マスター』開拓社.

(おがた たかふみ：英語学科 教授)

意味とカテゴリー：
前置詞 *at, in, to, for, from, on, by, with* の分析

緒 方 隆 文

A Categorical Approach to the Prepositions
AT, IN, TO, FOR, FROM, ON, BY and *WITH*

Takafumi OGATA

筑紫女学園大学
人間文化研究所年報

第31号
2020年

ANNUAL REPORT
of
THE HUMANITIES RESEARCH INSTITUTE
Chikushi Jogakuen University
No. 31
2020